

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：17301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13195

研究課題名(和文) 剽窃が困難となるレポート論題の類型化と論題に応じたルーブリックの開発

研究課題名(英文) A typology of plagiarism-preventing essay questions and development of rubrics corresponding to essay questions

研究代表者

成瀬 尚志 (NARUSE, Takashi)

長崎大学・大学教育イノベーションセンター・准教授

研究者番号：60467644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ライティング教育においてはこれまでほとんど重視されてこなかったレポート論題の重要性を、インターネットなどからの剽窃を防ぎ、思考を促すという観点から研究した。第一に、剽窃を防ぐ論題の類型を分析し、剽窃を防ぐための具体的な論題案を開発することができた。第二に、アンダーソンらによる改訂版タキソノミー(教育目標の分類学)に対応させた「レポート論題タキソノミー」を開発し、授業設計と論題を関連付ける枠組みを提示した。

研究成果の概要(英文)：Essay questions are rarely studied in writing education. Our study has focused on the importance of essay questions for preventing internet plagiarism and promoting thinking on the students' side. Firstly, we analyzed the types of essay questions that can be used to prevent plagiarism and provided concrete examples of plagiarism-preventing essay questions. Secondly, we developed an "essay question taxonomy" corresponding to the revised taxonomy (taxonomy of educational goals) offered by Anderson et al. and then presented a framework for using essay questions to design a course.

研究分野：高等教育

キーワード：レポート課題 レポート論題 剽窃 コピペ レポート評価

1. 研究開始当初の背景

客観的なレポート評価を行なうために大学においても近年ルーブリック評価が広く取り入れられるようになってきた。しかしながらルーブリックを用いて評価しても信頼性と妥当性を確保しがたいというのは実際にルーブリック評価を行なった際に多くの教員が感じる実感であり、また研究によっても示されている。

他方、レポート評価について検討する際に見落とされがちであるのが「論題の設定」である。例えば「オリジナリティ(主張の新規性)」という評価項目はしばしばレポート評価のルーブリックにおいて見られるものであるが、社会問題をテーマにしたレポート論題においては、(授業内容を越えた)オリジナルな論点や主張を学部レベルのレポートに求めることは高度過ぎるであろう。しかしながら、授業やテキストで扱った内容をそのままレポート課題で求めた場合(つまりオリジナリティを求めない場合)そのレポートのどのような点を評価すべきであろうか。こうしたことからレポート評価の問題は論題の設定の仕方と密接に関わっているのである。

さらに、論題の設定は現在問題となっている「剽窃問題」にも密接に関わっている。例えば、「(学問上の理論や立場)とは何か説明せよ」という論題はレポート課題においてしばしば見られるが、こうした論題は、インターネットで検索すれば解答に近い記述がすぐに手に入ることが多い。一方、学問上の理論や立場を現実的な問題に応用させたり、具体例を挙げさせたりするような論題は剽窃が困難であることを研究代表者は明らかにした。そこで本研究では研究代表者のこれまでの研究をさらに発展させ、「具体例を挙げる」というもの以外に剽窃が困難となる論題パターンを見出すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究で取り組むのは「大学におけるレポート課題をどのように評価すべきか」という大学教員にとっての共通の課題である。この課題を解決するために本研究では次の二つを目指した。

- (1) 学生の能力が適切にレポートに反映されるような、剽窃が困難となる論題パターンを見出し類型化する。
- (2) 論題パターンに応じてどのような観点で評価すべきかについて検討し、論題パターンごとのルーブリックを作成する。

本研究成果はレポート評価の信頼性と妥当性の確保に寄与するだけでなく、現在問題となっている「剽窃問題」を本質的な形で解決することにもつながると考える。

3. 研究の方法

当初は剽窃が困難となるレポート論題を、

哲学、歴史学、教育社会学の各分野において考案し、それが実際に剽窃が困難であるかどうかについて実証的に明らかにする予定であった。しかし、論題についての分析を進めていく中で、剽窃が困難となる論題の構造的特徴を明らかにすることができたことから、剽窃が困難となる論題の設計プロセスの解明や体系化など、理論的分析にシフトした。具体的には下記の方法で研究を進めた。

- (1) レポート論題に関する海外の文献の調査
- (2) レポート課題に関する大学教員向けのアンケート調査
- (3) 授業で出題されているレポート論題の収集・分析
- (4) 剽窃が困難となる論題の設計プロセスの解明
- (5) レポート論題の体系化(レポート論題タキソノミーの構築)
- (6) 剽窃が困難となる論題の評価方法の分析

4. 研究成果

現在どのようなレポート課題が出題されているかを明らかにするために「レポート課題に関するアンケート調査」をおこない、レポート課題に対する大学教員の意識調査とともに論題を収集した。その結果、多くの教員が論題の設定や評価について困難を抱えていることが明らかとなった。また、海外の剽窃対策研究に対するレビューもおこない、海外においても本研究のような剽窃を防ぐための具体的な論題設定の研究という問題設定の研究はほとんどないことがわかった。

レポート論題についての分析を重ねることで、剽窃が困難となる論題の構造的特徴を見出すことができた。剽窃が困難となる論題とは「特異性を伴った論題」のことであり、その特異性は「形式の特異性」と「内容の特異性」に分けられることがわかった。その上で、学生がインターネットの情報などをすでに手にしていることから、そうした情報(素材)をもとにどのように学生に思考を求めることができるかについて検討し、素材をベースにした論題設計法を体系的に構築することができた。また、レポート論題のスコープ(対象範囲)を考慮に入れることで、論題が対象としている範囲を「テーマに関する知識」、「情報収集」、「レポートリテラシー」、「推敲」、「メタ認知」の5つの知識の内容に分けられることがわかった。それにより、論題には認知的なレベル(理解する、応用する、分析する、評価する、創造する)と知識次元の二つの側面があることがわかった。それにより、アンダーソンらによる改訂版タキソノミーと融合できることがわかり、論題に関するタキソノミーである「レポート論題タキソノミー」を構築することが出来た。

剽窃が困難となる論題に応じたレポート

評価のタイプについても検討し、論題で求められていることがレポートに書かれているか否かの2段階で評価できるタイプの論題と、質的に評価すべき論題とに分けることができ、さらに、後者は構造化を求めるものとそうでないものとに分けられることがわかった。また、ライティング教育において、分野横断的に指導されている「論証型レポート」の汎用性には問題があるため、初年次教育でのライティング指導に関しては専門で求められてくるスキルの検討ともに再考すべきであることを明らかにした。

これらの研究成果として、成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』（ひつじ書房）を2016年12月に出版することが出来た。本書は、レポート課題について「レポート論題」、「授業設計」、「評価」の3つの観点から検討した大学教員向けのガイドブックであり、本研究の集大成でもある。本研究は読売新聞（2015年12月3日）の「論点」と読売教育ネットワークの「異見交論」でも取り上げられた。また、多数の大学からレポート課題の設計に関する講演依頼を受けたことなどから、本研究成果の意義は広く認識されたと言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

成瀬尚志「レポート課題における論題設定の重要性 学生の思考を促す論題とは」『FDジャーナル』跡見学園女子大学、査読無、第16号、2017年、pp.2-6.

〔学会発表〕（計5件）

成瀬尚志、児島功和、崎山直樹 [口頭発表]「レポート論題研究からみるライティング教育の課題」2018年3月20日、第24回大学教育研究フォーラム、京都大学（京都府・京都市）

成瀬尚志、児島功和、崎山直樹「レポート論題と評価の種類」2017年6月11日、大学教育学会第39回大会、広島大学（広島県・東広島市）

成瀬尚志、笠木雅史、児島功和、高橋亮介、崎山直樹、片山悠樹、井頭昌彦「レポート論題タキソノミー 論題のスコープに着目して」2017年3月20日、第23回大学教育研究フォーラム、京都大学（京都府・京都市）

成瀬尚志、笠木雅史、児島功和、崎山直樹、高橋亮介、片山悠樹、井頭昌彦「レポート課題タキソノミー 剽窃が困難となる論題分析」2016年6月12日、大学教育学会第38回大会、立命館大学大い

ばらきキャンパス（大阪府・茨木市）

成瀬尚志、井頭昌彦、笠木雅史、片山悠樹、児島功和、崎山直樹、高橋亮介「レポート課題において何を問うべきか レポート論題に関するアンケート調査から」2016年3月18日、第22回大学教育研究フォーラム、京都大学（京都府・京都市）

〔図書〕（計1件）

成瀬尚志編、成瀬尚志、河野哲也、石井英真、笠木雅史、児島功和、高橋亮介、片山悠樹、崎山直樹、井頭昌彦著（2016）『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房、184頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ

<http://ihuru09.jp/archives/projects/%e3%83%ac%e3%83%9d%e3%83%bc%e3%83%88%e8%a9%95%e4%be%a1%e7%a0%94%e7%a9%b6>

本研究は読売新聞（2015年12月3日）の「論点」と読売教育ネットワークの「異見交論」でも取り上げられた。

【招待講演】

成瀬尚志「剽窃が困難となるレポート論題」八洲学園FD研修会、2018年3月22日、八洲学園大学（神奈川県・横浜市）

成瀬尚志「学生を思考にいざなうレポート課題」愛媛大学工学部FD講演会、2017年9月7日、愛媛大学（愛媛県・松山市）

成瀬尚志「分かりやすい文章表現」平成29年度参議院事務局調査室新規配属職員研修、2017年8月31日、参議院第二別館南棟（東京都・千代田区）

成瀬尚志「ワークショップ：学生の思考力を高めるレポート課題の設計」東北大学高度教養教育・学生支援機構主催・共催行事、2017年6月23日、東北大学（宮城県・仙台市）

成瀬尚志「ループリック評価とレポート課題の提示方法」関西大学第13回日常的FD懇話会、2016年11月18日、関西大学（大阪府・吹田市）

成瀬尚志「レポート課題における論題設定の重要性 学生の思考を促す論題と

は？」跡見学園女子大学 FD 講演会、2016 年 11 月 16 日、跡見学園女子大学（埼玉県・新座市）

成瀬尚志「学生の思考力を培うレポート論題の設計」第 40 回アカデミック・ジャパニーズ研究会「アカデミック・ジャパニーズにおけるパフォーマンス評価としてのループリックを考える」2016 年 11 月 5 日、龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」（京都府・京都市）

成瀬尚志「学問的誠実性を培う学部教育レポート論題の設定」IDE セミナー「研究倫理教育の挑戦 - 不正防止から能力構築へ - 」2016 年 8 月 26 日、京都大学楽友会館（京都府・京都市）

成瀬尚志「レポート課題をいかにして設計するか？ - 剽窃が困難となるレポート論題とレベル設定 - 」神戸学院大学 FD セミナー、2016 年 6 月 15 日、24 日、神戸学院大学（兵庫県・神戸市）

成瀬尚志「剽窃レポートをいかにして防ぐか」北星学園大学共通科目部門 FD 企画、2016 年 3 月 7 日、北星学園大学（北海道・札幌市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

成瀬 尚志 (NARUSE, Takashi)
長崎大学・大学教育イノベーションセンター・准教授
研究者番号：60467644

(2) 研究分担者

笠木 雅史 (KASAKI, Masashi)
名古屋大学・教養教育院・特任准教授
研究者番号：60713576

児島 功和 (KOJIMA, Yoshikazu)
山梨学院大学・経営情報学部・特任准教授
研究者番号：80574409

崎山 直樹 (SAKIYAMA, Naoki)
千葉大学・国際教養学部・講師
研究者番号：10513088

(3) 連携研究者

高橋 亮介 (TAKAHASHI, Ryosuke)
首都大学東京・都市教養学部・准教授
研究者番号：10708647

片山 悠樹 (KATAYAMA, Yuki)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40509882

井頭 昌彦 (IGASHIRA, Masahiko)
一橋大学・社会学部・准教授
研究者番号：70533321